

国立音楽大学附属図書館  
2015●図書館展示 10月



# 本物あります。

新1号館サインパネル貴重楽譜展



展示期間●10月10日(土)～11月5日(木)

展示場所●図書館ブラウジングルーム

企画●国立音楽大学附属図書館広報委員会

## 新1号館のサインパネル

2011年9月に完成した新1号館のサインパネルには、当館所蔵の貴重楽譜が使用されています。これらの貴重楽譜の「本物」は普段図書館ではなく、温度や湿度が管理された保存庫で保管されています。今回の展示ではその中から5点を選び、「本物」を展示します。  
※解説はサインパネルキャプションの転載です。

**Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791**

**Œuvres complètes de Wolfgang Amadeus Mozart**

**モーツァルト, ヴォルフガング アマデウス 1756-1791**

**モーツァルト全集 第一部 ピアノ編**

**Leipzig, Breitkopf & Härtel, 1798-1806**

**Spot:新1号館1Fホワイト**

---

18世紀の後半は音楽史に関する書物が相次いで出版され、それに伴って作曲家の個人全集の出版が始まるが、この全集はその先鞭をつけた出版物である。モーツァルトの死後に開始された曲集は、タイトルに“Œuvres complètes”を置くが、字句どおりの全集ではなく、選集である。3部にわかれ、第1部がピアノ編でピアノ音楽、歌曲、ピアノを伴った室内楽曲の全17巻からなる。

縁飾りで飾られた緑色のカバー、当時の一流の画家による口絵、楽曲のインチピット付き内容一覧というデザインは全巻に共通している。第1巻は「モーツァルトの墓の前で悲しむ遺児を抱いたコンスタンツェ」であるが、それ以外は、ほとんどギリシャ神話にもとづくネオ・クラシックな図柄である。印刷はブライトコプフ社が発明した可動活字印刷であったが、この印刷方法は当時最も一般的に行なわれた彫版印刷に比べると経費がかかり、もはや時代遅れであった。ブライトコプフ社はこの全集の後、可動活字印刷を捨て、彫版やリトグラフによる印刷方法に転換している。

**Beethoven, Ludwig van, 1770-1827**

**Sinfonie mit Schluss-Chor über Schillers Ode : An die Freude, op. 125 für grosses Orchester, 4 Solo- und 4 Chor-Stimmen**

**ベートーヴェン, ルートヴィヒ ヴァン 1770-1827**

**交響曲 第9番 二短調 op.125**

**Mainz, Schott's Söhne, 1826 初版**

**Spot:新1号館1F**

---

作品123の《ミサ・ソレムニス》、作品124の《序曲 献堂式》とセットで行なわれた予約出版である。スコア、パート譜、ヴォーカル・スコアが同時に出版された。ベートーヴェン時代の出版譜はフランス語で記される事が多かったが、後期に入るとドイツ語が主流になる。表紙は被献呈者であるプロイセン国王の紋章と名前が大きく彫られ、作曲者の名前はその下に置かれている。同じ1826年中に出版された後刷にはメトロノーム記号が付された。

**Brahms, Johannes, 1833-1897**

**Vier Lieder für eine Singstimme mit Begleitung des Pianoforte, op. 96**

**ブラームス, ヨハネス 1833-1897**

**四つの歌 op. 96**

**Berlin, Simrock, 1886 初版**

**Spot:新1号館4F**

---

《死はすがすがしい夜》、《ぼくらはそぞろ歩いた》、《花は仰ぎ見る》、《船路》の4曲。ブラームスの熱烈な讃美者であり、すばらしいピアニストでもあった彫刻家マックス・クリンガーの手になる表紙である。『海』と名付けられ、色は灰色がかった茶色、クリンガーのサイン「M. K. 86」が右下に見える。クリンガーの別の版画『風景』もくるみ表紙として使われた。世紀末的な幻想世界を顕したこの表紙について、作曲者は画家を仲介した出版者ジムロクとクリンガーに不満を表明している。

**Parchment manuscript, fragment**

**羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 12 世紀**

**Spot:新1号館 B1 F**

---

ネウマの書体や音高表示文字のある赤色譜線つき楽譜であることから、12 世紀後半に北イタリア（ミラノないしはボローニャ周辺）で書かれた聖歌本の一葉と考えられる。テキストは四旬節第 2 週の月曜日のミサ固有文コンムニオに始まり、火曜日、水曜日のミサ固有文（裏面）へと続いている。表面右側には 18 世紀および 19 世紀の筆による 5 種類の書き込みがある。この写本を 10 世紀のものとするその内容には多くの疑問が残るが、18 世紀から関心をよんだ興味深い一葉である。羊皮紙の大きさは縦 27 センチ横 19 センチである。

**Parchment manuscript, fragment**

**羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 14 世紀**

**Spot:新1号館 B1 F**

---

赤色 4 線四角形ネウマ譜によるアンティフォナ集（アンティフォナは聖歌の一種）の一葉で、テキストは復活祭用のもの。おそらく 14 世紀後半にパドヴァ周辺で書かれたと推定される。頭文字 A (Angelus) にはキリストの復活の場面が描かれており、そこにはジョットのフレスコ画の影響が認められる。羊皮紙の大きさは縦 43 センチ横 19 センチ、頭文字 A は縦 70 ミリ横 67 ミリである。

## 関連書籍紹介

### ① 楽譜の歴史：ヨーロッパ記譜法の変遷 / 皆川達夫著

全音楽譜出版社, 1970, 請求記号: C28-434  
古代バビロニアから近代前衛音楽の楽譜まで、楽譜の種類や記譜法の変遷が簡潔にまとめてあります。

### ② グレゴリオ聖歌セミオロジー：古楽譜記号解説解釈 / E.カルディーヌ著；水嶋良雄訳

音楽之友社, 1979, 請求記号: C29-081  
現在の五線譜が確立する前の楽譜記号について、図版入りで書かれています。巻末に譜例索引があります。

### ③ 楽譜の話あれこれ / 伊藤義雄著

ムジカノーヴァ, 1982, 請求記号: C35-260  
時代ごとに代表的な作曲家を挙げ、その作曲や出版活動についてまとめています。

### ④ 単音楽の記譜法 / ブルーノ・シュテープライン著

(シリーズ 人間と音楽の歴史. 第 3 シリーズ, 中世とルネサンスの音楽 ; 第 4 巻)  
音楽之友社, 1986, 請求記号: C22-247

### ⑤ 多声音楽の記譜法 / ハインリヒ・ベッセラー、ペーター・ギュルケ著

(シリーズ 人間と音楽の歴史. 第 3 シリーズ, 中世とルネサンスの音楽 ; 第 5 巻)  
音楽之友社, 1985, 請求記号: C56-757  
「人間と音楽の歴史」シリーズは参考図書室にあります。第 4～5 巻は記譜法について。7 世紀のラテン語典礼まで遡り、楽譜成立の背景が細かく書いてあります。大きな図版が多く、美しい装飾楽譜のカラーページもあります。

### ⑥ 楽譜の文化史 / 大崎滋生著

音楽之友社, 1993, 請求記号: 63-453  
近代市民社会の中で楽譜がどのように商品化していったか、知ることが出来ます。

### ⑦ 記譜法の歴史：モンテヴェルディからベートーヴェンへ / カーリン・パウルスマイアー著；久保田慶一訳

春秋社, 2015, 請求記号: J129-018  
17 世紀前半から古典派まで、記譜法の変遷が詳しく書いてあります。訳者は副学長の久保田慶一先生です。

### ⑧ Johannes Brahms und Fritz Simrock : Weg einer Freundschaft: Briefe des Verlegers an den Komponisten. Mit einer Einführung / hrsg. von Kurt Stephenson

J.J. Augustin, 1961, 請求記号: C3-723  
ブラームスとジムロック社(Simrock)との書簡集。

### ⑨ Der Briefwechsel mit dem Verlag Schott / Ludwig van Beethoven ; herausgegeben vom Beethoven-Haus Bonn.

G. Henle, c1985, 請求記号: C16-897  
ベートーヴェンとシュット社(Schott)との書簡集。

● 展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>

2015/10/9 編集●国立音楽大学附属図書館広報委員会 : 三宅巖・古庄もも